

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20

ル4
4565
1

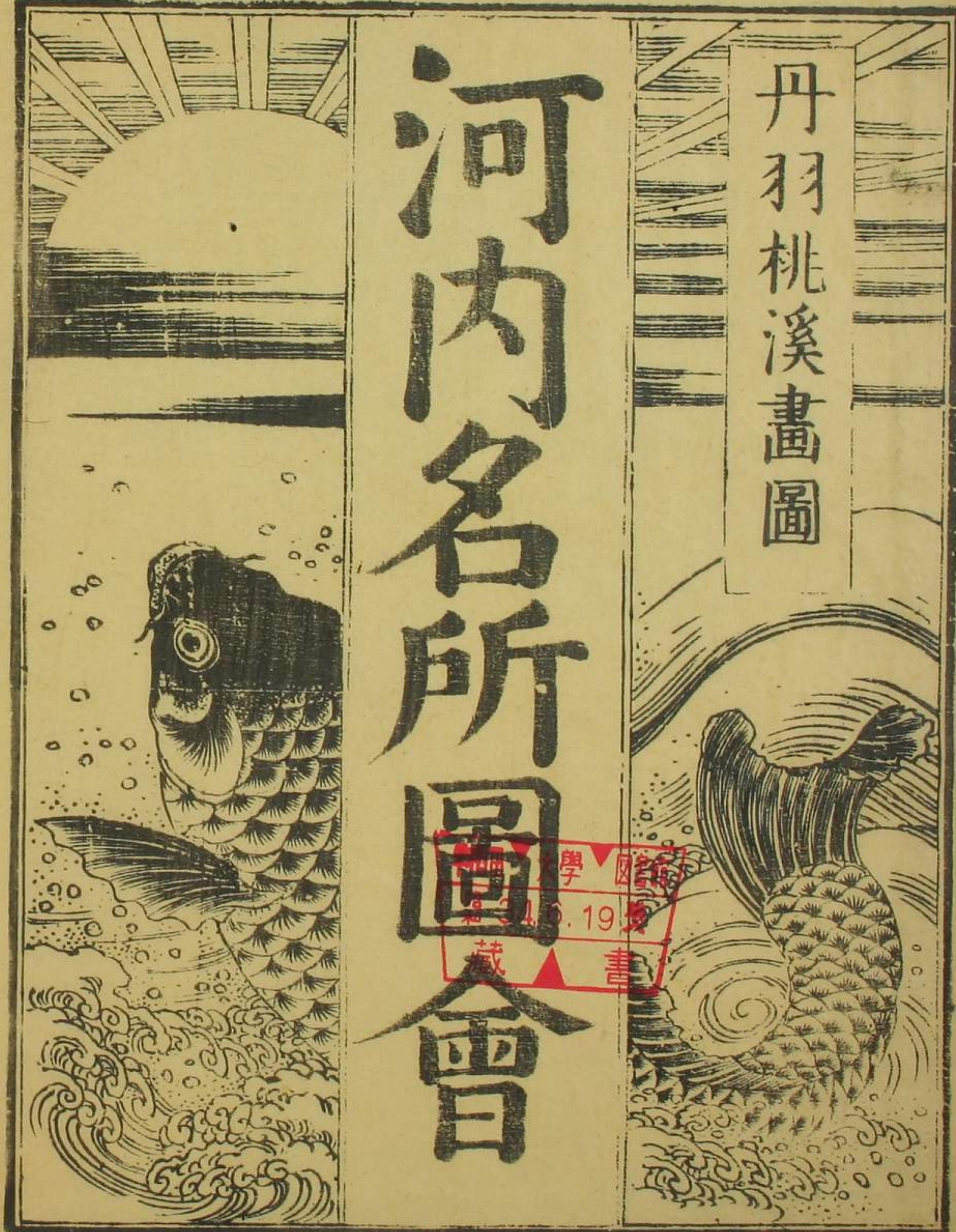
河内名所圖會



門號
卷
4565
1

河内名所圖會

丹羽桃溪畫圖



學圖
藏書
1950.1.19

河内名所圖會序
凡之勝古蹟沉於史文者無
不風光七多之集內之
矣之山川之也固母之
至之津河內之也此之
矣之也揚京二國之不固

之言乎已刻乃云於此而以本
也、曉是猶宋之謂也。余
亦何獨之有國之強恆之
與之盡於此也。於是以幾而古
考之。公之能弘斯道者生也。而
以德子生也。乃之三十

初之至第於所就圃之灌既
自養圃之外。而後以之
就宇。久未嘗教植。幸有
人教之。之種乃之。也。雖
之也。其事之均往。未時
之進教之未嘗完國之也。

此身之うか年以重厚せし初
士氣志在以起先之歲、のん不第
於火事、お見も字亦内也。因
税たる實を主と作考之功而
お清報を而志焉多々、あまふ
國名の國へ云國へみはえすふ

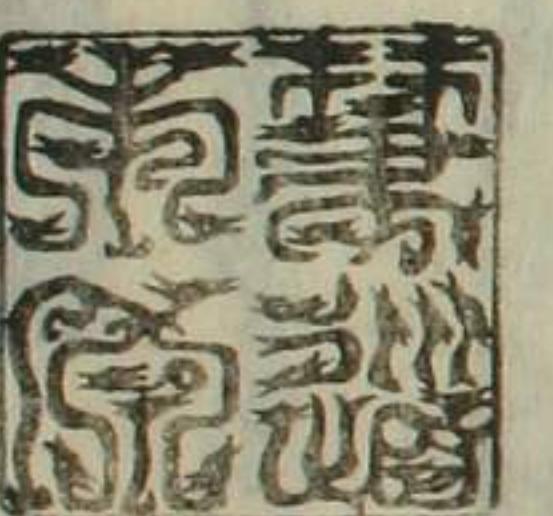
阿内序

它乃取一之於其之云

亨ノ吉之年秋有初六

通文ムシノ一揆

花山院大納言兼右大將愛德卿



河内名所之賦

高麗書院藏

角旅同亞相君玉藻を考第^{トウ}一ノ紀録美談あるが那
あらふ冠^{カサ}を戴^{カサガフ}す事にりては又かく屬^{スル}御月の名^{ムツ}しる
ふえ^ルやせわんを兼^{シム}の邊を

神日本盤余壺のまことみと孔舍衛段をばとひたてて其國^{クニ}
あもれ白肩の傳にひてモ龍壺を証^{シテ}むと國^{クニ}尔
入後^{アフタ}ち扱^{ハシマフ}の國^{クニ}名^{メイ}リル^トひめかうぢう^セハ北向^{ヒガタガフ}
かひく和泉^{ワケイ}もつせ^ル也^シ 元正の勅詔あり、元の主をすゆ
之郡をかほみの國^{クニ}と^シおとせ山^{ヤマ}をよみの山^{ヤマ}を山^{ヤマ}

私^モの志^シふ志^シ小^シぬ^シね^シも^シ大^シ江^シ北^シ南^シ大^シ一^シを^シ立^シ井^シか^シい^シる
往^シ駒^シ至^シ滿^シ金剛^シ山^シを^シせ^シ事^シレ^シあ^シま^シハ^シ國^{クニ}に^シす^シから^シ 檜^シ山^シ
彦^シ窓^シ切^シ北^シか^シき^シ使^シ能^シ尾^シ事^シの日^シア^シ年^シら^シ能^シ様^シ能^シ、
ち^シを^シ見^シ、^シと^シえ^シ高^シと^シう^シ梨^シ宇^シ滿^シ人の目^シを^シ見^シま^シ川^シ
石^シ川^シ當^シ龜^シ瀬^シ川^シ名^シや^シ原^シ川^シも^シみ^シま^シハ^シ星^シ因^シ
もの川^シ七^シ夕^シは^シめ^シお^シう^シ人^シと^シ業^シも^シみ^シま^シハ^シ星^シ因^シ
も^シか^シ地^シ下^シる^シ名^シハ^シ一^シ行^シ足^シ万^シ葉^シ集^シお^シえ^シと^シあ^シ瀬^シ川^シ
名^シの^シ高^シ一^シ顧^シ毛^シ河^シ上^シみ^シ行^シ二^シ上^シび^シ峠^シハ^シ棟^シう^シ根^シ
十三^シ此^シ地^シ内^シハ^シ名^シの^シ國^{クニ}と^シ毛^シあ^シと^シお^シい^シま^シひ^シま^シあ^シ國^{クニ}

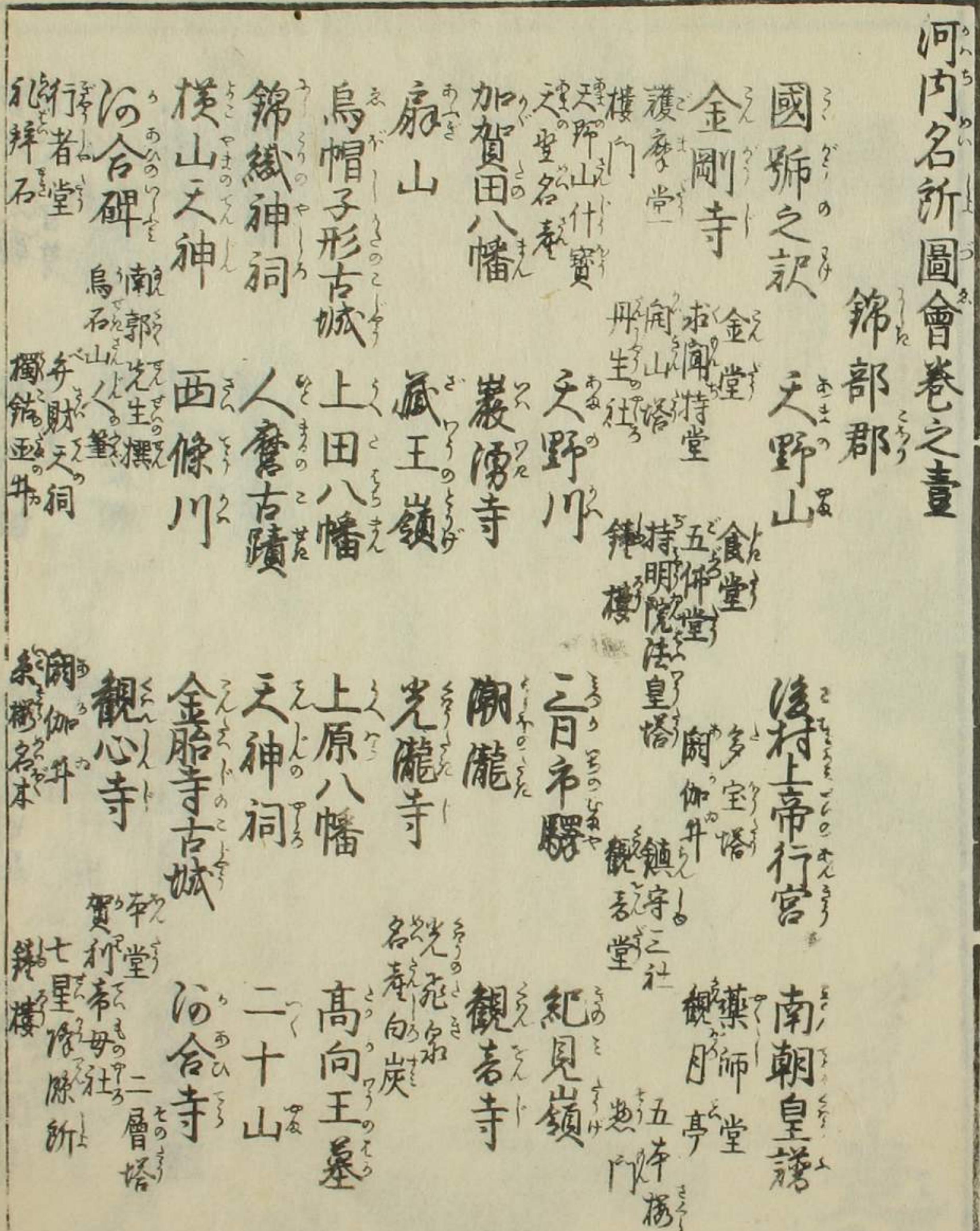
ミタ先達ノ人等ハモ向の訛アリテ一太田この國ニアリシ平
アムルハ神小櫻ノキ向ニ通スモノの名アリト野舟比壁ニ
及正の高の草古の頃文殊ハナリヘの高ケラ陽里土佐の里高安
山モハカリシモノヒの高ケラ陽里山ツヤムサト度シテ有リ
自のケリモノノ絶洞アハ於モコモヤハ思ハ高キモ早の櫻
久保のハ高ハ御ハ傳シタルカヨキノ神のたまらハ高ヒモトガ
櫻社ハ早赤坂小根内金胎高城龍泉寺の城シミスル高蘭ク
ユタヒロ
羅城タタヒロノ社モ平岡譽田壺井道明寺の社佐ち御モ
其外迎喜式肉のさゝみ也モ一寺ハ天野北寺モ也

後村上のみやどれり室アリテ天御飯と御次觀心寺ハ楠^{シダ}菩提而
モセ弘川寺アハ西リハ事喜モハ弘法大師の遺蹟あり
上の左るハ一扇之奥アハ高峯山下の左るにハ神妙様アリ
夏^{アマ}はちハ源永の墳也アリ^{アマ}玉子の木ハ楠^{シダ}川と萬葉^{アマ}又
御寺ニシテ葛井^{アマ}モハ東園の下づれ^{アマ}也^{アマ}萬葉^{アマ}
市壺井ハ源永相傳の伝アリ^{アマ}萬葉^{アマ}王仁の墓真雅の墓
楠^{シダ}成正行の墓アリ^{アマ}萬葉^{アマ}畿内州の御^{アマ}山背^{アマ}
ヤ^{アマ}大和獨摩^{アマ}を勝^{アマ}也^{アマ}萬葉紀伊^{アマ}尾也^{アマ}也

山川乃するべく秀さんへさうれ木の葉れまほせとましと
美だれハ此をうほひあはれの處をたすもあへに御方のもとひ
雨もひく後ひわきうそツミヤ原とやかく人も原葉京めうり
やあとえうらみの山めうりが六堂感むれやまんせ

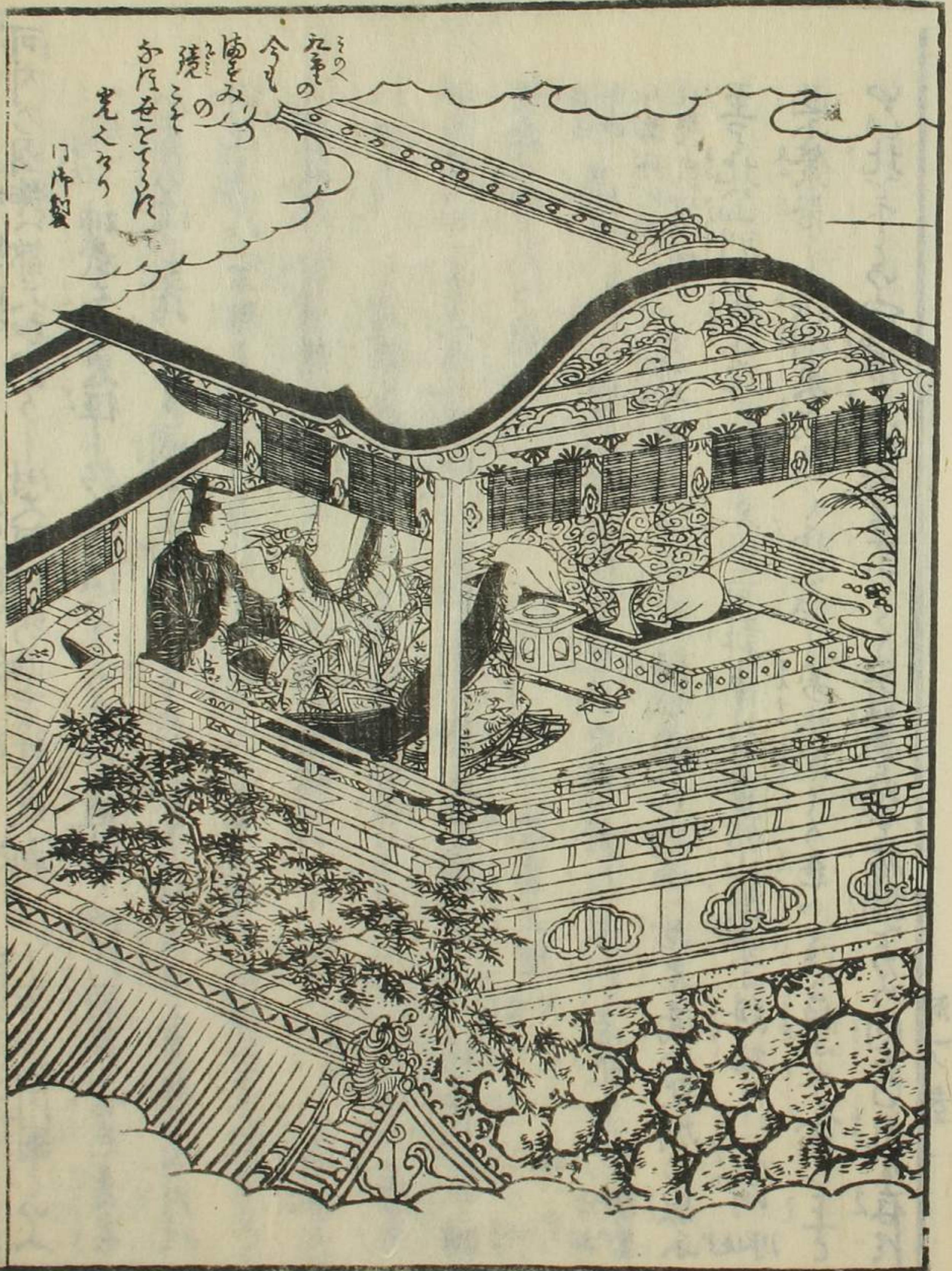
東和くめの葉るの社

林里竹離翁





寶上人廟
觀心寺官符
中院什室
八幡宮
高向齋
寺元
浦氏殿
爐原
僧善誠
正成嚴姪
正成嚴姪
正成嚴姪
正成嚴姪
正成嚴姪
正行高
法持上隱陵



門序題

今も
海をみ
境とそ
かほせとて
光えりう

な事の
ねの
波

波

南方紀傳云
あさよう
佐勢太林宮ふ
奉幣使まし
御門三種の
神儀とあ
あく神製

天野殿

觀月亭

鰐村上帝

皇居

隆村上書
序題

四の海れ
波とがこゆ
ちく一やく
二つの寶次
身ふぞけゆ

河ノ貢



河内

河内の國都、都人和あつて河内國の西山城也。但り、上古九國と云
九撮括（のくわく）神武天皇東征、當時、浪速もろ大にと遡流く河内國草薙色者を
向肩の津（むかひのつ）小至海（こまへ）、是國号の顯れ。トドロく人皇十九代、反正天皇都と河内北
丹比小遷都。六年、木立、木紫羅宮といひ是居小高（こだか）と、風雨和平よりぐく
五穀成熟、人民富饒、天下泰平。これ、河内國之皇城のあり。縁（ゆゑ）、日上、元明帝力
御宇小詔。諸國の國郡の名と一文字定めんの字、省略。續日、元正帝、至龜
四年四月甲子日、根和水の二郡と割く始く。智泉園。類聚延喜式云、率國
管郡十四名あり。錦部（きぬべ）、石門（いしもん）、太子傳林（おとしのりん）、古市（こち）、安宿大縣（あそくおおけん）、養老四年十月併ニ
爲大高安（おほたか）、俗呼恩（おん）。管郡十一名。疆域東、和列西、揚泉南、紀州の東、
丹南丹北後ス割。此郡一出八上郡。河内瀬度（せど）、更荒。茨田、交野、若江、淡川、志紀、丹比、倭
至アモ北山別の界、小至都。東西五里許、南北十里。竹山嶽、東小糾絡（とうしづるく）。又河川、
西下榮帶（せいかくじやう）。地相東南高く、西北低。多水、南流。故小土人、南と上と
之北と下と、風俗素朴淳厚。又奢靡（さめい）、好歌舞。移築、力尚古の風氣存焉。

錦部郡

婦々棉布、次第、而至。謂之内本綿と称。従、租稅公解、延喜式、又、足利、
あに畠に、神武天皇初の御附差已る、保里令と國造。文化小國也。至孟龜に
二郡と珍努官（ちのひのまこと）供ト。神護小由義官伏見河、西東と。極武帝都と平安城、
遷。行、父安東南郊と。星宿、南朝、久遠。今楠氏守護。足利の代
留山高屋城、居。飯益山と。好長臺と。正年中、小豐臣秀吉公主と。
後醍醐天皇

諸城廢。攝州の布政司と。加車と事ト。今、舊風承。
勅書集

君そらは家より、尾も宮居。深山、近所、丹都く。蘿原忠

○後醍醐天皇 人皇九十五代、御諱尊治。後宇多院第、二皇子正應元年
十一月二日誕生。嘉元二年十一月九日御元服同日叙三位。德治三年九月十九日太子立文保二年二月廿六日践祚御年二十
同二月十九日御即位延元二年八月十六日崩。吉野如意輪寺永葬。年廿

尊良親王

一品中務卿

若宮

一品跡奥別官

宗良親王

征東將軍中務卿

若宮

又号宇集房之宮

護良親王

征夷將軍兵部卿初想本門跡還俗

與良親王

遠州宮

世良親王

大宰帥上野太守卑世母宰相實俊女

恒良親王

東宮荷坊

母阿野中將公廉女新侍賢門院

成良親王

征夫將軍上野太守

成良親王

御譲義良一品兵部卿母新侍賢門院阿野中將廉女

後村上院

正平廿三年戊申三月十一日崩御河州檜尾山觀心寺後山築陵

忠尊法親王

聖護院代郡麓山

懷良親王

征西將軍中務卿元中五年戊辰三月十八日薨去葬于肥後八代郡麓山

大覺寺宮

被祿少國配流為名號

無文和尚

處州興山法興寺角山也

入唐之人

長慶院

御譲寬成文中二年癸丑二月御讓位同四月八日御落飾法名金剛心

後龜山院

御譲潔成母嘉吉門院勝子近衛左大臣經宗安元中九年壬申北朝明德三年和平十月五日御讓位奉太上天皇尊號應永

泰成親王

二十一年甲辰四月十二日崩御葬城州葛野郡北嵯峨福田寺後式部卿太宰帥後正西將軍

南帝

後村上帝即位の後一馬入道親厚常隆幽神皇正統記立奏

獻せる先帝の女帝崇子歸佛をもつて行戒師へ青蓮院並道法親王

其附女帝一首の歌と尊者法親王を遣し給ひ

そひ事とあくた濟の一トヒト色ふ出るそみそられ神

萬葉子

太宗記云

付頃吉野の新帝の間の王室

所と皇居とせま勢の桶矢馬頭正儀和田

和泉守義人主那殿小姫

奏聞一ノ畠を率いて上洛はれ故の努力定く

境東海東山南海小陸通の丘

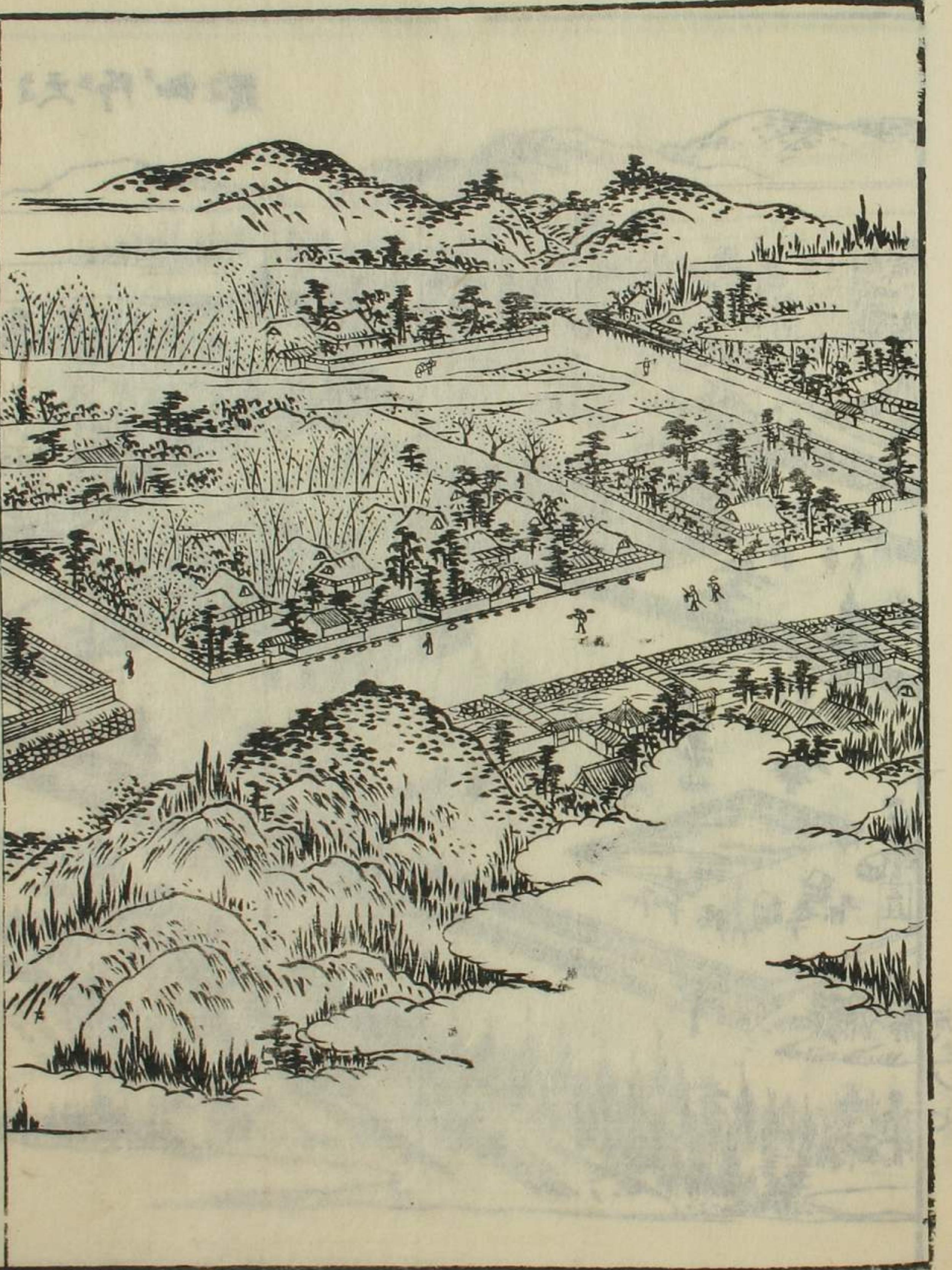
峯を以て上洛はれ故の努力定く

軍の謀公爵

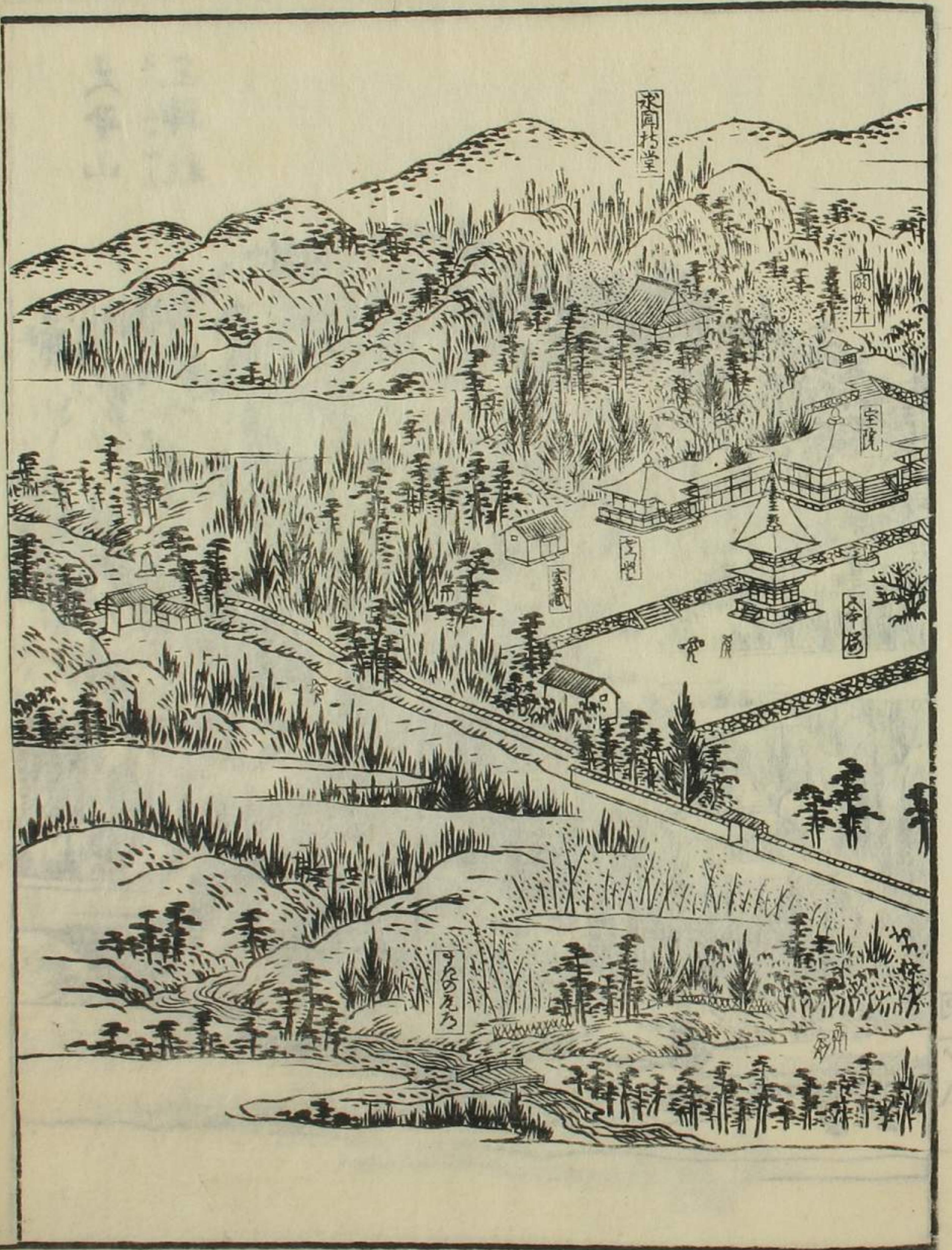
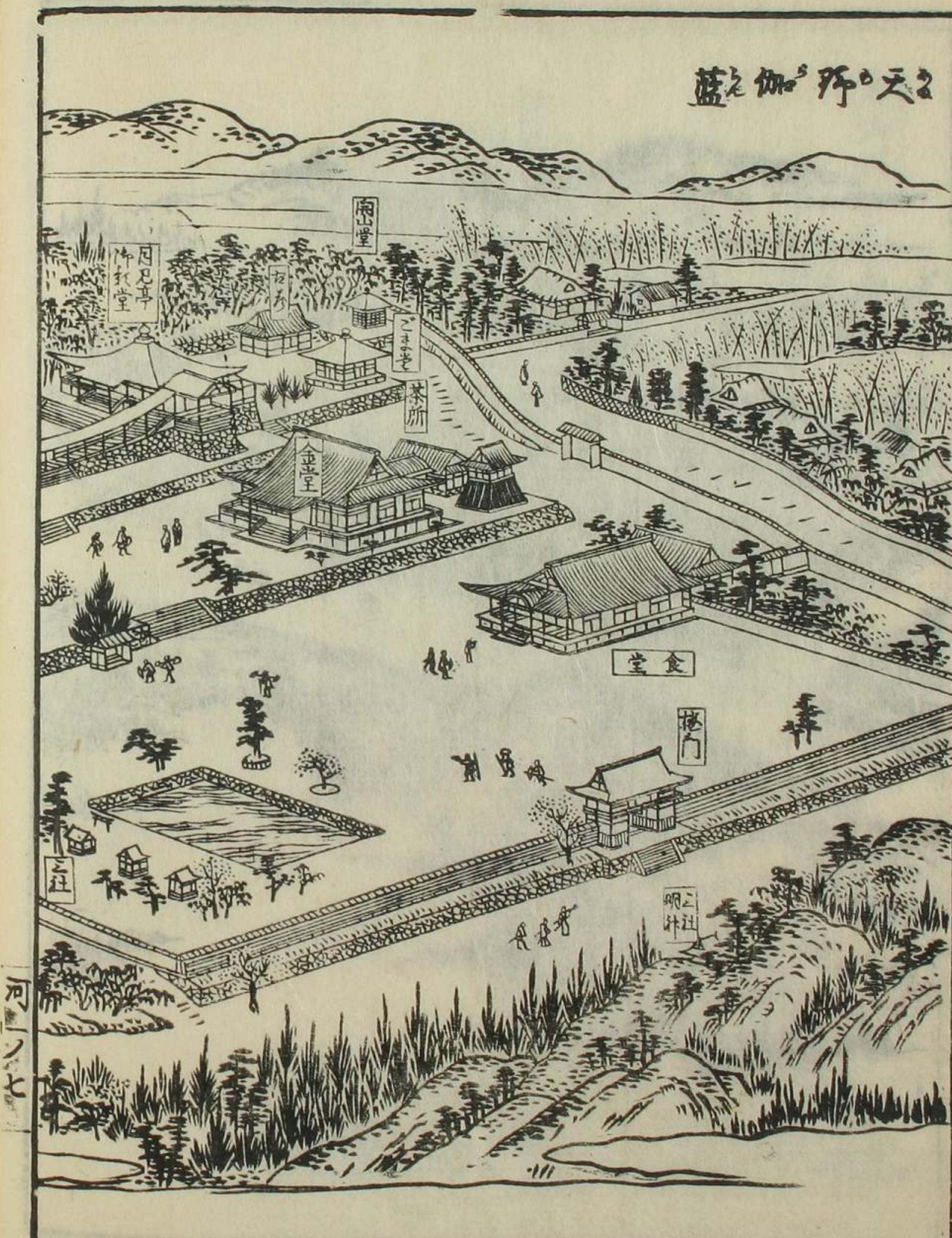
所謂その時勢の利人のむてひがゆも遠く附り勢あつと

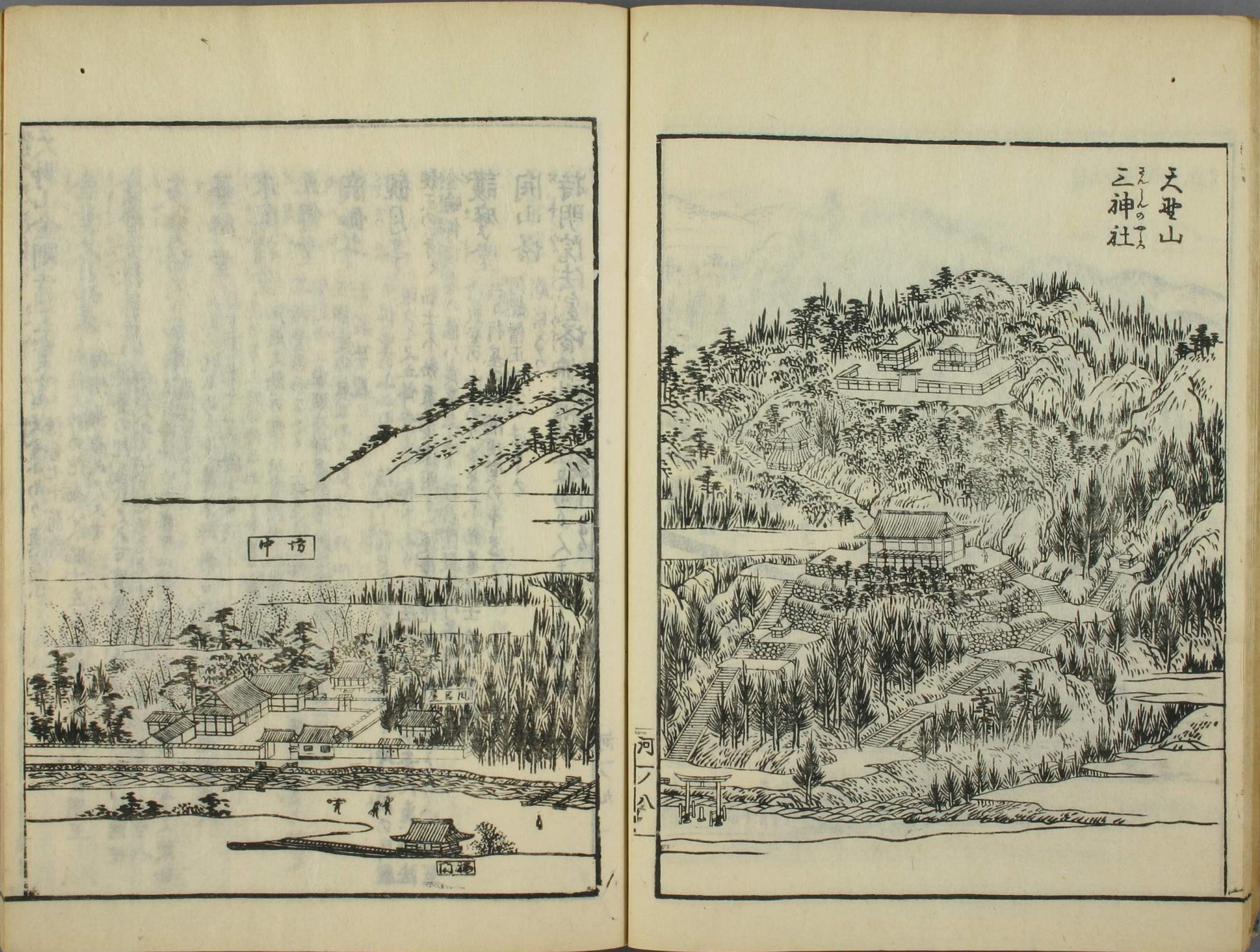
之を揚車と傳せども又さういふの時又はく勅へ明年よりノ將軍西少主と東をうへ年塞之畠山を至り後東國を守て坐す是已小弓の宗遠れをもや次め地の利を計く案づひ又御方の陣後深山み連う故案門をあくに水の流く僅か橋一之路とせら左近は元弘の千車の軍中を小及び其後建武の乱より以至細川帶刀同陰奥を頑民山名伊豆守時氏高武藏も師直同越後守泰今の畠山道を誓み至るまく既小六箇段は所不寄く勇猛とすひ戦と拠り小敵の軍遂小利わば或戸とのあゝ道小曝し或尼を敗少の陳を費ひ是當山形勝の地要害が便をひるゆそひよのむほどて思案公廻一尔今方畠山が上洛の際をひ義小僧く忠賞を松木貪々の志をひかに本細川の一族共もわざ撫威と精土岐佐木一類も其忠賞を煥ひるは是又の心をもとむ所をひき天子の三徳をかぐ遠ひひて綻故有あり努を併せても恐く小足の跡とくは但今之皇居と飯小膳ろが跡とくを金剛山の奥觀心寺とや跡御座を極へ進をせひく正儀正武等の御衆の内

の勢と相はへて平金剛山より篭て龍泉石川の急水かけ出で自立參るお敷
湯浅山奉恩寺智顕の野上山牛の丘也紀伊國の守護代守を半勢に付く
龍門山最初孝子陣を擰て紀伊川充急母伏を出へて周を食せ攻め思を
迷ひて城へうなぎ氣を放つて勞ひとう退屈さをひき退屈して小遣と者より集
めを追ひ數と千里の外を駆け御運と時小園へ是應安を所の合戦をと車を
あひ車をやう主工を始進をく近侍の日卿善客をすまく皆多のり年車をもる
タクニ転て觀心寺と皇居を極へ進を車を除むるを用ひて今をもる且百貫
金車をも具されば外の地を傍流をもく御敷をもく御敷の附がゆへと出さればは
攝政園田太政官左右大將と申納言と舞八位六位後宮の義歸青上達部内侍裏
上臈女房出典房官至るまゝ或るが精川大河の右門十津川の方小流域である
体げね山賊も小憂憂身を害すもありあるひと志賀の古來未みの舊都秉
白の小考へ主故軍の中を拂はれ居く魂を消す人もあり



天子伽耶院





天野山金剛寺二寶院

傍舍七十箇所

直言宗

金堂ノ日如來

弘法大師の化長八尺脇士左不動明王右淨土世明王

食堂文殊菩薩

蓮慶の化長八尺脇士右不動明王左不動

多寶塔ノ日如來

蓮慶の化塔中四面の邊板を龕の畫が精緻文殊勸

藥師堂

上殿の地より平尊藥師佛と行基菩薩の化長八尺

求廟持堂

西方上殿の地より平尊虛空藏菩薩ハ

五佛堂

弘法大師の化堂内女人結界所

護摩堂

東照太神君の供養と安日月の御

圓伽耳

五佛堂の奥より弘法大師加持水

觀月亭

五佛堂の小堂より後村上院月見の序殿今又重被風の序殿

持明院法宣塔

後村上院月見の序殿今又重被風の序殿

南山塔

阿観僧正覺心法下

持明院法宣塔

後村上院月見の序殿今又重被風の序殿

鎮守二社

南の方より東照太神并財天

五牟櫻

金堂のち

樓門

東向毘沙門特國の二丈と安に蓮慶の化長八尺

額金剛寺

後村上院月見の序殿

丹生明神社

橋門の東山腰より丹生高堂水分の神を儀く之度成事

觀音堂

東向金剛院より

懸門

東向金剛院より

三當

葛城の崇岡古佛傳輪の聖跡阿育王鐵塔奉収の聖域

て僧正行基の草創より厥后弘法大師密法傳りニ密瑜珈の淨龍院

星宿ありて四百峯を尋する至跡大荒廢に後向の院清掌承万元年

紀のあとの山門阿觀ある衣高聖明神

爰々坐若あり向圓入野澤た

はく廢蹟と興すと參阿觀こと瑞

昂錫を起山小室も箇

の教澤と下るより異人岩上小蹕跡に阿觀云々と仰ぐ人をも有らず城が建かず
九神天所澤み樓く阿觀觀を孟夏と今之示理と符合を以て翁も度に
あたまくり方か一因茲廻隆の志願厚く周株を奏に後白の法皇獻心
清とて嘉安元年の夏高屋内に憲圓を詔して再嘗ある昂昂金堂食堂
御新堂の諸伽藍悉成就に又併舍利と賜て小安一又嵯峨寺山寺二
皇子真如法親王の際を経て弘法大師の圖画と御新堂を安一丹生あらうの
神祠を遠く鎮護す後白の院の傍となり右舜賴朝娘の御教書建久三年
八條女院様と下りて傍坊ニ綱七十尺坊と達す一而同六年石川判官代源義重
寺領ノ國役諸役雜革長免除せし院宣と名す後白の法皇再建の由致と
き前ノ才二皇子守覺法親王の裔寺と考す建保二年七月嘉陽門院故院政
女院の芳信と感ド喬圓を經ぐ女の高跡ノ称號ノ由ニシテ學頭阿闍梨
多寔也の瑞光を有す阿育と名の鐵輪を感得古佛聖跡なり半身少半身それ乃
昂其出現の所と今塔毛山と充弘二年畠兵部親王太塔官の令旨を賜て播州

西山庄行儀の用費を爲す建保一年十一月後醍醐帝鳳詔と下して東寺専修
の併舍利を粒とあひを收す延元元年十月小勅願寺と成南朝平十年北朝の上室
萬宗りを同年八月持明院重寧頃禪良法と戒師と同力年勅奉の重居を
當山昌極一伽藍今堂を常御殿とす楠木はし尉正儀和田和泉吉三郎の英雄也
寺僧一草子天所殿と称す同十年南帝の微君僧徒互勅と若樂と傳受す一め
有能の樂器を書附一法金を御通す同土年持明院法皇御灌頂の志願のつむ
嵯峨寺の御灌頂あつて弘法大師自画一の胎金あ那の天皇泰和として下連と申す
二ノ神事法事と雖も御灌頂の師と一樂其曼陀羅を勅すと當ふ御納じ後村正帝
麿圓又達一泉州庵庄持川山田尼と結縁灌頂の科と四海は平の御被法毎年貢
えられり同十五年中興阿觀と賜僧正と仕一代の聖主將軍家國の半務業に至
極萬字の形揚を爲すあらびれ信と後五華の唐詩と鍊聲白雲寺和松声寶閣と
づる美梅匂いをまの妙を谷を研一松立岩の水音道陣と松葉山閣と有ひて實錄あり
の翠微寺究と杜詩尔山水の絶筆とあれと御玉壇もつてきし

天野山什寶大畧

兩部 大曼茶羅 一幅弘法大师最初禁中坐あり 同様子曼茶羅 中興 阿麗

持明院法室拂寄附 持明院比丘尼頭戴の髪髪とりて、懸立中一俗小

釋迦三尊種子 中將法師比丘尼頭戴の髪髪とりて、懸立中一俗小

佛舍利 岩後白河法室高山再興の時

持明院拂寄附 絹紙金泥

佛舍利 中將法師比丘尼頭戴の髪髪とりて、懸立中一俗小

天竺阿育王鐵塔 日本二箇國の畫寶の其一也

最勝王經 聖武帝宸翰 紙金泥

最勝王經 聖武帝宸翰 紙金泥

毘婆娑論 光明皇后

聖武帝宸翰 紙金泥

東寺傳來佛舍利

高村上院拂寄附

天竺阿育王鐵塔

日本二箇國の畫寶の其一也

菊水太刀 鎧通刀 銀銷守刀 五威新郎

正成本像

坊舍中院什室

愛深明王 弘法大师

坊中無量寿院什室

不動尊 沙深和上

屢周 一奴ハ土佐光信等

聖德太子

拂衣院退治寺

僧仰仰御其外坊中小什室

天豐川

末ハ彼山の他み入高聖街道之藏舍多くあつて、日の斜る所に

二日市驛

東作難波くらの高聖街道之藏舍多くあつて、日の斜る所に

紀見嶺

天見村のあふわう紀州伊都郡の峠

紀見嶺

天見村のあふわう紀州伊都郡の峠

島山

島山就寛正12年の墓

夏見る紀の見崎村木も人毋はうせく嘆若然さん

義豊

加賀田八幡宮

加賀田小豆寺と互通すと

巖湧寺

加賀田村の南小豆寺

潮瀧

日聖村の東小豆寺

本尊十一面觀音

弘法大师石像圖

化

建之

本尊丈日如來

本像長

觀音

丈八寸

當寺へ行基大士の開基みとて天豐山同世の建堂ことを什寶

若経六百巻ありを弘達寺の後廟小祠懸懸の付御味方とも長陣

御寫も多し正徳二年本田勝利忠統虔全部を運長久の

のたら其費用と喜捨に車き

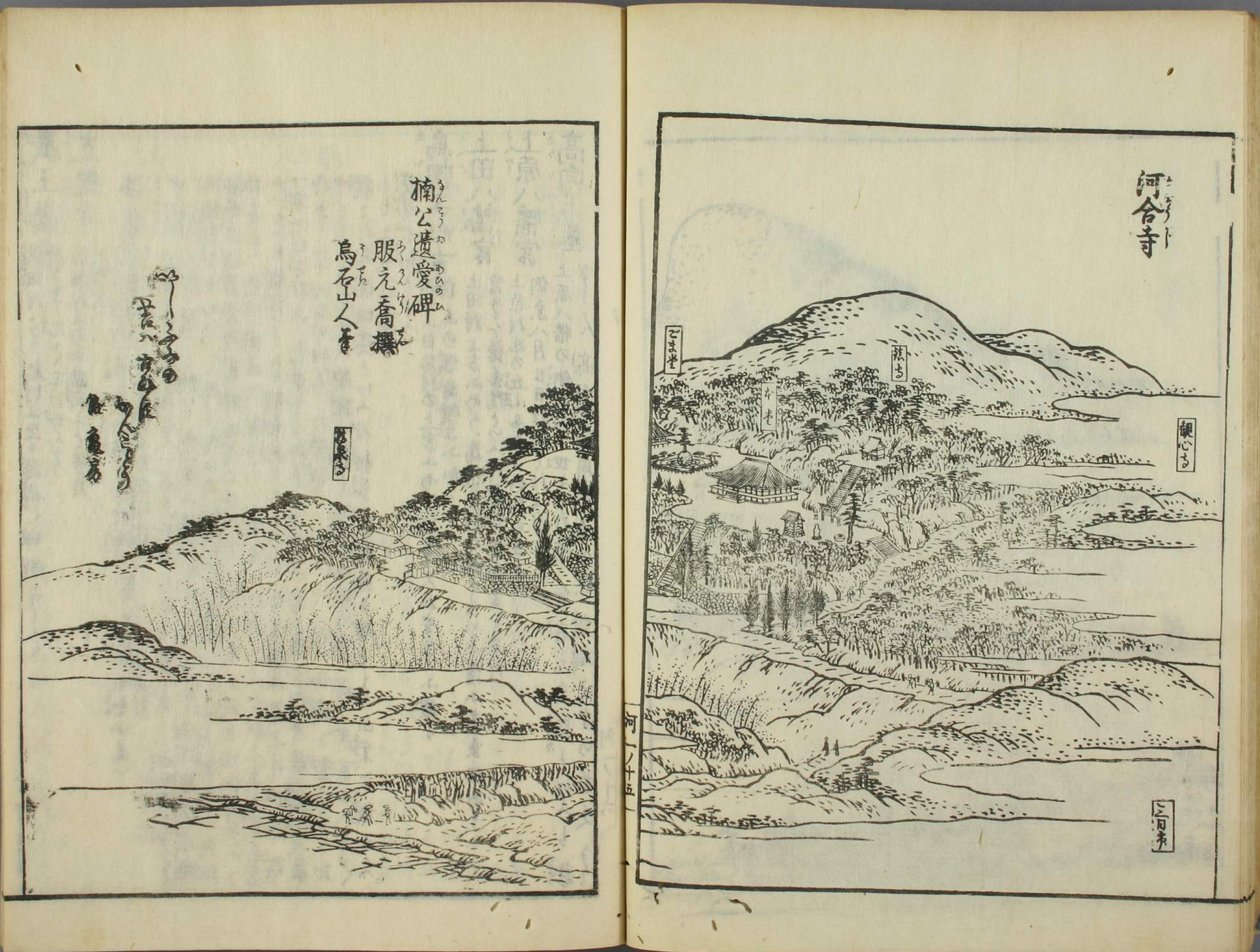
扇

山扇細村の東小豆寺の扇とひづたくる形に加くらゆ名にとふ

拂摩塵也くはあく







藏王嶺

御神村より紀別至る國東嶺々

光瀧寺

勝細村より福王山と号す

本尊不動明王

長安行滿上人の他脇士

多宝塔

五智山東と

光瀧

寺堂の木小あり高五丈一名光明樹飛虎玉龍を舞白虹側小

一宇とむをびく化現とし角本尊とし其後役小角

馬頭巖

山鬼と號うと號る又山奥玉瑞塔庵矣みよ瀑布准胝

拂留城威徳窟業師窟釋迦尾火黒石龜石吹來支杓屋圓伽井等名蹟之鉛松

拂留城

山へ欽明帝の御願寺と稱すと同基へ行滿上人入山人幽山光

不一七ヶ日練り一夕時忽然不動菩薩現れ岩上に立

鳥帽子形古城

上田北村の上方小あり確井大和守ちふ據る

上田八幡宮

上田村上方小あり鳥帽子形八幡もり人傳小高良祠あり

上原八幡宮

上原村西の丘山小あり山野の生土神とし

高向王墓

例祭八月廿日社傍にて成す

仲哀天皇陵とし火葬

上原八幡

上原八幡の側小これ成

仲哀天皇陵とし火葬

長安陵

又松下見林の前王廟陵記云河内園志紀郡惠誠長安の西

子葬附

陵所今浦郡長堂庄上原村小祠立に志紀郡

衣

衣もとかぬりかてくら小くもの錦織の妻本之なり

天神祠

錦織神祠向田村小あり山野の生土神とし土人

二十山

古跡錦織神祠向田村小あり山野の生土神とし土人

延文五年

閏四月廿九日の曉拂梗一揆五百多騎馬びやう木津を山

木津を山

木津を山

太平記云

木津を山

木津を山

木津を山

木津を山

下へすがまのりぬをの事のまを不龍宿の代本戸にあがトを同名小團扇
扇と便り細川相模守氏と赤松秀弟範寔と二十宗陣うち居て居てはる龍宿
の緑波をすてアヤ余先をからめを便城切で金る半々太幸をとミモ真
れを鉢とひがれ馬を鞍並け旗を一志げとみ程を有タレ相模守秀弟と鎧
取肩かびくみ道を真綱かとて龍泉の西城高橋の下を上る

桜山大神祠

桜山村西條川の東涯小より其側の巖の隠ノ瀬土のあたり

西條川

西條川源四流あり一ハ松原大澤嶺のあたり流く石見村又
流く石佛村又く石佛川とつゝ大井崎原觀心寺等大經く之日市より
一ハ九重峠より出く巖瀬ふの櫛谷より賀田村大經く

石佛川又入一ハ藏王峠より出く

長谷

とつゝ庵川とつゝ流く西條川

とつゝ末ハ石川又會す

金胎寺古城

勝村の上方みあり建武年中執軍もみ據る松城十
七ヶ所の其一也又寛正年中萬歳殿就も亦ちに

寶珠山河合寺

河合村山中より
古跡あり

本尊十一面觀世音

長毛足付許脇士金猪兩部大日も又不動明王
毘沙門天成安院櫻西廟の守卒もり

鎮守春日神祠

本堂の側より河合寺村生土朴とし
例系七月十八日

河合寺碑

堂あらわし第る南郭先生承へ鳥石山人うり
寛保二年秋八月建其銘云

河内挾山晁子君采以邦大夫世采其封南河合邑

邑有河合寺邑名馬記曰古者皇極帝二年勅建

列朝相繼奉信增脩以至南朝宋為崇觀興州之觀

心金剛兩寺屹為三大利勅旨數奉禱事勝國之亂

諸閣壞廢大半而其國宣及楠氏所令手書至今藏

鎮焉晁子之立碑於此為寺觀微乎存乎曰否為尚

楠氏也何以尚之為楠氏遺愛也古者楠氏盡忠乎

興國正平時南北戰爭數十年矣誠節貫天地知略

蓋四海恢復之功雖不成全其子其孫三世志業不

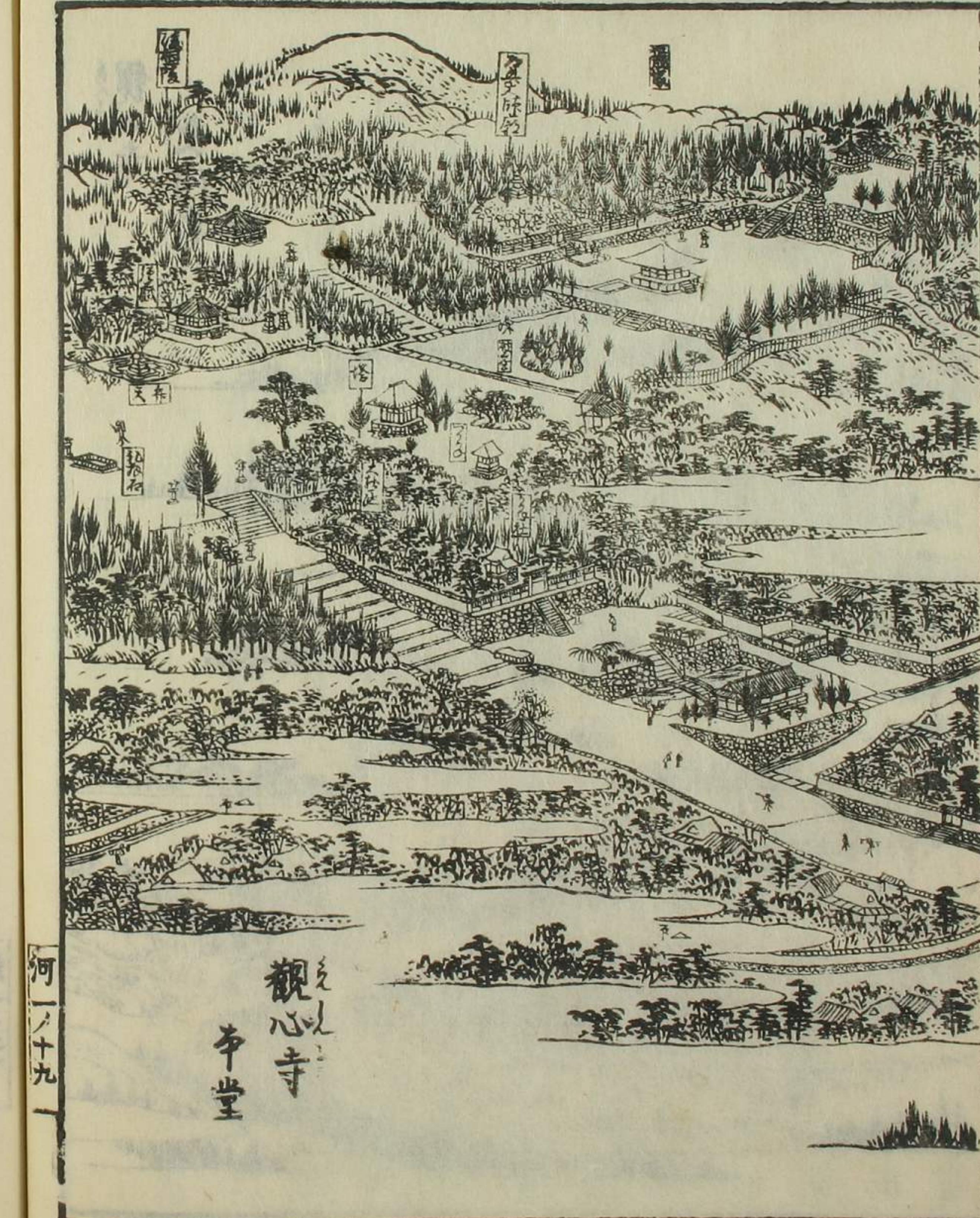
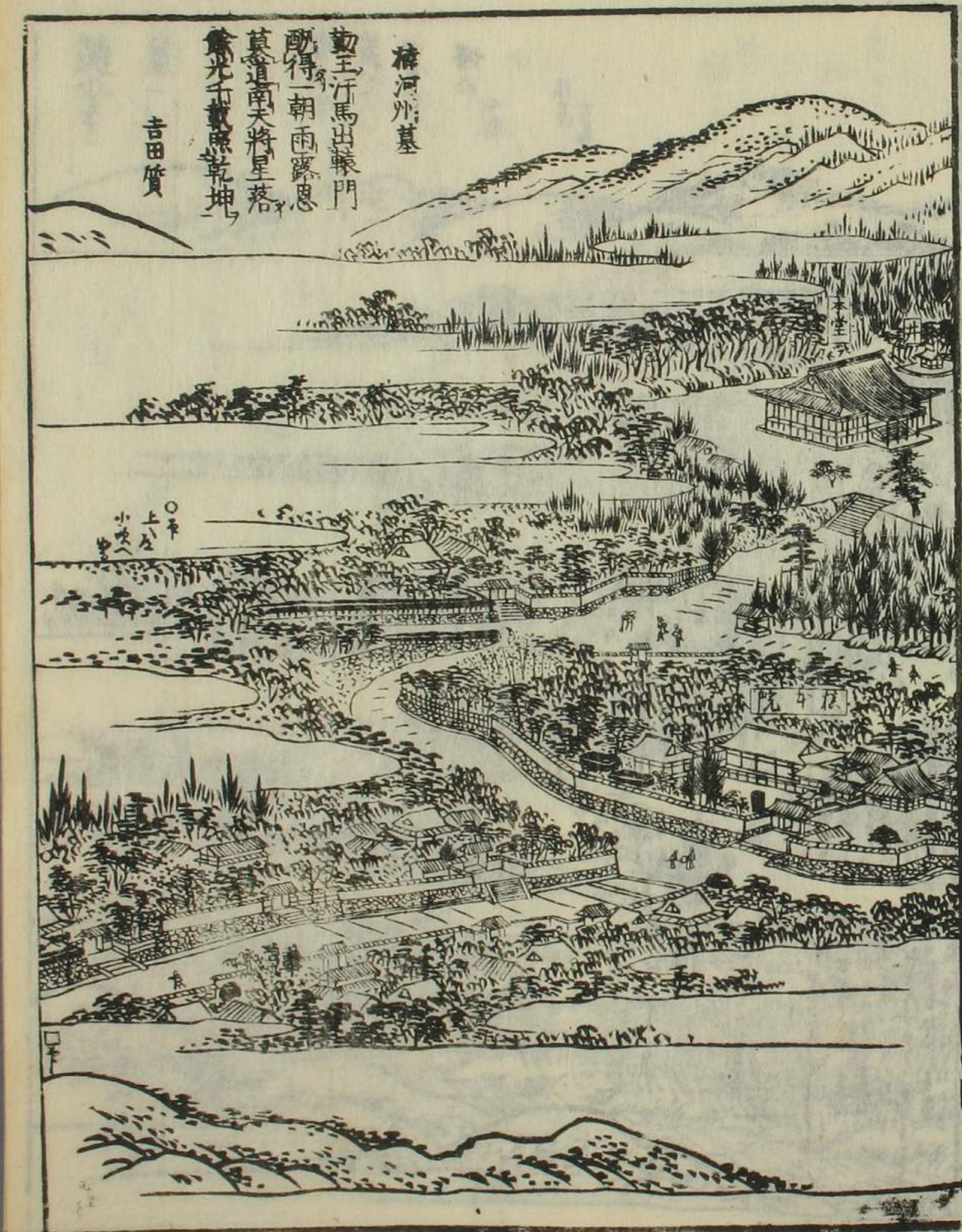
渝實與南朝社稷相終始焉天下後世至于今時莫

不感激出涕喜言其事焉是為遺愛也為楠氏遺愛
衆矣曷為獨於此河內與泉攝當其時楠氏世守也
前此攝有湊川碑泉則未聞焉爾而河內其所基據
遺愛尤存金剛千早城趾也何以不碑焉晁子曰吾
嘗略行金剛千早一石不存噫蓋竟外爾蓋河合碑
則晁子遺愛乎我也遺愛乎我者遺愛乎已也因祖
之所遠聞而石乎私土甘棠之遺焉往而不愛以君
子之為亦有樂乎此也楠氏之功德天下後世至于今
時莫不感激出涕喜言其事焉所見同辯所聞同辯
所傳聞同辯是謂口碑備矣不必具列其事則不獨
其遺愛也寺觀雖微乎存後此以楠氏重則楠氏之
亦獨遺愛於此也此立石之志也寃保三年秋八月
服元喬撰烏石書晁泰亮立

魏心寺

表門志







檜尾山觀心寺 觀心寺村ふゆ

平尊七星如意彌觀世音

弘法大師作長丈尺八寸脇土不動地王計尺寸六分
愛條明王計尺寸九分

建挂塔

心柱と大日の表一阿彌寶生院起並と安す補正成建立の
石柱ふみありノキ半身海すにて止仍て仮金棺の墓蓋より北

外の軍兵がモ礼焼にて塔の九燭と下ト燭もよ燭たると太平地主をハ酒

肉船六万さの半るて飲むるのよ小あく火後篇よ出せり

拂衣堂 長丈尺八寸

弘法大師の像と安す 塔のふみあり

經堂

塔のふみあり

賀利帝母社

神像毘首獨摩化鉢す八分厨子熱長九寸計分制本官
弘法大師唐士

行者堂

西門の内也あら役行者

并財天祠

金堂の東塗中ト

圓伽井

金堂の内也あら

七星障除所

塔内七ヶ所

礼拜石

金堂の裏又あら弘法大師

打鉢正井

金堂の裏又あら

魚櫻

打鉢正井の例又あら

時代の

實惠上人廟

金堂の東上三方也あら謹通興入所俗姓法

和倫氏

擴別の人に室海小隨ひ支那密法

と稟

文長12年觀心寺と建當に後山と檜尾

故み捨尾

御子承和10年十一月十三日寂

年六十之元亨釋書

本願院廢の前より實惠の像を

小刀

安す長計八寸をす八分

楠正成首塚

定惠廟の東北あり延光元年五月廿八日攝州淡川又於
正成相臣の遠代と記む地あり元織田年水野芳門先國
卿後士佐助之助の命によりて此を穿ちて石窟と埋め置か
其後を續め楠正成靈源光國造立と記し塔上小石碑と達て塔文と
溝もを正成相臣の被を覆すといひて左邊ハ嘉慶十九年水野芳門先國
鎮と納るの地かくも三君龕の今ある所あり右塚の周り本塚うりと
近本石塚と云ふ丈八尺五寸九尺八寸五寸五分サニ大石幅八寸角無
一式攝州淡川山石うり石塚の北面隅柱と陰て中央七寸八分文と
傍を一筋十字づけ一本又文字二筋づきあり

傳聞正成教訓子弟眷屬率土之瀆莫非王臣爾況君恩也不如二節以死報我子第于茲家族守訓言有餘歲美名存乎不肖流立而不耻思惟先祖之餘寛政五年仲春吉旦

島山尾張守墓西成家の

東小刀

謂曰溥天之下莫非王土國於聊不忠之輩不可為
所補三州之守誠莫大之專忠貞而不變至今四百
孫衣敝縕袍與衣狐貉者光矣哉故鐫墉以垂永久
潘成位欽書

後村上院陵
南方紀傳云
後村上院陵
四方より樂より陵上に塔樹あり

南朝正平廿四年

二年小高る

崩を右聖

後村上院

崩

と右聖

如惠輪寺小葬る 後村上院と謹奉る同年冬十月足利官領

細川頼之南朝奉奏聞申様へ古のゆく持明院殿と之覽き後

と一代からうふ御治世あらへて二種の神畠と北朝一脉

南小沛和睦遊

あら沛上宿めば公家武家の

本領卒のゆく矣小官加階相違ある無うべど再三奏聞と

之とも南朝の公卿武職等それと用べてく和睦潤事ふ

此時南朝の領地は内大臣和泉紀伊伊賀伊勢志摩菟道

信濃上野越中越後伊豫佐お石見長門肥後日向久間

薩摩山國小征東將軍宗良親王九州小征西將軍良懷親王

勢弱小北畠の國司ありまじく

同記云

元和

南朝文政二年二月十一日南方

後村上院の御七回忌右聖如意

河ノ二十二

輪寺小於く大法會あり導師へ日聖丈傍正頼意其時宗良親王

和奇と詔く頼意へ送りゆ

參まうちて見だらうかじたも首れつゝもあら

あら御退居

世の事ひつゝもあらあら花とあら面紙

頼意傳云

四つもの力のかうふくみうきのけは爰とやろかねした

南朝

御

南方の室居ち金剛山の奥觀心まと云源ふあれば左右ふく歎の
迎く歎を所さうね共行候の御警固は憑思召する龍泉赤坂も
あられ又昨日一昨日まで御方せり無能も今日多く御歎と成ぬ
と聞ててふる人松人素内者らしくづくの山林奥まで御歎
入ぬと申ゆ大へんへ主上とぞぞをまく女院皇后月卿玄客
あいきを極むと懼びれさせり車限か

觀心寺官符曰

寺壹院

在山内國錦郡郡石川郡兩郡南山中

合山地千五百町

地名仁深野

錦部郡以山中一千町

東限橫岑，南限小月見谷

四至西限紀伊道門多公田，北限龍泉寺地名石川郡界

石川郡以南山中五百町

北限石川家井堰

承和二年閏二月十二日

官符

禮一專後寔始，有住寰四降右當之本佛世，是被聖所斯方臨寺者記曰美尊法末，下主貴哉哉。摸靈山也。寺記曰功紹資皇山貴哉哉。摸靈山也。寺記曰盡隆等道北吾勝印之月山也。寺記曰勇先之宣潛寺地頗山圓達峯也。寺記曰猛師計兼衛勅神絕證嶽弘懇和略知之施秀妙云僅涉聳尚丹尚者此伽之定蓋朗入遙阻都下腥葉自行之大仍直上符願如雲心之至阿勘抽朝乘以道斯之精緣家秘為場然寺密藏藍所造耶起安密當臻則弘觀念之全之寺承勵如全之寺作一件之精之和仁心易成利斗之尊刻精舍永明天寺獨谷星容三祈也格時長良豐為紅星

一深一藍傳一可濁輩尚一人卜觴彼浪式年之禮之一之比也和密法也來聖不淺速穿於之斯以源之訪歸彫鎮禮佛於者安抑信智洗鑿社福地山流時傳朝劄守石之金也置斯也僧愚三之頭田安谷到乳來之青祠者所堂持寶藍者當京師之南峙王畿之內於此尚子性塔事細不自能染真言道軒數代祖業靈寶也右鑄七體尊容報酬四恩廣

德無二懇志巧妙造作也密納寶庫不可出外
右戶矣勘錄大概如件

承和四年三月三日

真雅實慧

太上天皇奎壘有之

。法記弘法大師之上足真雅實慧西
上人の勘錄あり後小松院の
宸翰あり則御高判あり

生一毫縞至奧者亦可被染太上皇宸翰也
國泰極後代無境治の徳明時風德太平

應承癸巳祐洗中辨

閑向經嗣判

御輪旨
御輪尊愛榮王像就被寫至當寺內陣
代物願長日行法事
五代相應津業宜至行四海傳平
化くせ依東寺長者法榜傍正佛房作
統壹蓮如意

正平十五年正月十八日

法子仲尊

河ノ二十四

觀心寺僧

魏心寺内陣常燈為和代不朽勸願所被始至
國心寺紀伊國正稅學疏急の故沙汰之に被作
大氣乞上以件付長頤首然恐
正平十五年四月八日 佐治亮吉時長

追上

東寺長者曾正佛房

様正成書
御輪尊愛榮王像就被寫觀心寺大師
寺内陣常燈為和代不朽勸願所被始至
國心寺紀伊國正稅學疏急の故沙汰之に被作
大氣乞上以件付長頤首然恐
正平十五年四月八日 佐治亮吉時長

十月廿六日 正成判

勝賞の處

領作拂迷嘗盡處行遷官正之是生發喜入人
必く參請人恐

十二月一日 正行判

觀心寺僧

正行判

正儀書
魏心寺位侶等申處寺座主鐵幸申狀書
進上之子細載狀免弘壯旨可方序披為信
急忙彌三月三日

左馬門尉正儀半

河内國田庄山岸瀬田町親心地頭得令佐
先例可被彼管領也仕続連め件
正平五年四月十三日左馬門尉判

右の玄蕃判と花押落もし正時やとせるハ漫々と左了助正時ハ正平二年九
月十八日大和守小便ト正之と改名一正平二年己丑正月八日河洲口條殿之兄
正行と曰く討死に隠岐院陳雲輝劍大居士と云此去後ハ左馬門尉正儀也
之外南朝國宣威權氏崎山等者爲室奉事小滿足繁小角之
者くちやん其一二と奉約而三

坊中植本院畠

茶壺二銘替爵十六支

太刀

二腰銘一行平一正宗楠云所持
行平南朝天子より差領

牧溪

魏志舜恭菴子趙子昂杜律詩意舟舟相若
像画

呂輝

孔雀牡丹朱貫臣

秋月三笑

坊中中院什器

山坊舍ハ捕氏一族の宿坊なり

青貝奈鞍

綿緘腹巻

名劍

利

八幡宮

勝心寺兩門再興ハ江州志賀郡勝利村至本多後次慶之は

勝門の樂小鉢也

高向原

高向玄理宿禰の胤也

天皇十二年屏朝を階小在る本多

推古天皇十六年階小入く學父受ケ

三岳神祠

高向原石見川村あり又社の東小使役湯あり一名川社と云

八幡宮

高向原錦郡郡の人也舊趾今もうちて初の名も高向原呂輝内

高向原

高向玄理宿禰の胤也

天子小朝觀東宮監郭文舉と云ふ本郷の地理及び

高向原

高向原人之難波の朝廷刑部尚書大尼上國忍の子也

高向原

高向原人之難波の朝廷刑部尚書大尼上國忍の子也

中納言小住從和銅元年從三位小叙一

攝津太守小住從同八月薨

中納言小住從和銅元年從三位小叙一

攝津太守小住從同八月薨

僧善藏

錦織の人戒體嚴淨而博識洽聞具足の旨徳之

古今名所圖會卷之一

終

